

福祉研修会における学生の学びの検討

—障害理解と自己覚知を中心に—

小澤 薫・小池 由佳・石本 勝見

An Examination of Students' learning in Welfare Workshop: On Understanding the Disabled and Self-awareness

Kaoru OZAWA, Yuka KOIKE, Katsumi ISHIMOTO

はじめに

生活科学科生活福祉専攻では、講義や演習、実習の他に年に一度、学生のための福祉研修会を実施している。これは、将来福祉専門職を目指す学生に福祉の現場、福祉の利用者、支援者等のできるだけ生の声、姿にふれてもらい、講義等での学びをさらに深め、学びの意欲向上につなげて欲しいということを目的としている。専攻開設の2年目から実施されてきたが、この福祉研修会を通して、学生たちが何に気づき、学んできたかをまとめた形では残してはこなかった。

そこで本稿では、今年度実施された福祉研修会の内容と学生の「振り返りアンケート」から学生が福祉専門職を目指す者として何を学び、自己の成長につなげようとしているのかを明らかにし、この学生の気づきや学びを促す研修会のあり方について提言することを目的としている。特に今回の研修会の目的である「障害のある人たちの支援について、より深く原点から学ぶ」ことのキーワードとなる「障害理解」と「自己覚知」に焦点を当てることで、学生たちにその目的が伝わっているかを検討する。

1. これまでの研修会の目的と内容

これまで取り組んできた福祉研修会の目的

と内容については表1のとおりである。

第1回の福祉研修会のみが宿泊研修であった。第2回目以降は1日研修で、講師による講演が多くなっている。特に語り部である川島氏には4回講演をさせていただいている。

過去の福祉研修会の内容を振り返ってみると、多種多様な内容が組まれていることがわかる。学生の社会福祉への理解を進め、自己の福祉観・人間観を再確認するために、さまざまな視点からの研修が可能であるといえるだろう。

2. 今年度の研修会の目的と内容

1) 研修会の目的

平成17年度は、障害のある人の支援について、より深く原点から学ぶことを目指して、福祉現場での経験と実績のある講師から話をしてもらうこととした。また、この研修が学生にとってどのような体験として受け止められたのかを確認するために「振り返り」アンケートを実施することとした。

2) 日時等

今年度の研修会は、平成17年7月2日(土)、「新潟ユニゾンプラザ」大研修室で行われた。時間は9時30分から12時。まず3人の講師に

表1 過去の福祉研修会の目的と内容

年度	目的	内容
平成6年度	<ul style="list-style-type: none"> ・レクリエーション活動を体験する ・福祉について相互に学び合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・制作活動及びグループでのディスカッション（宿泊）
平成7年度	<ul style="list-style-type: none"> ・大型児童館について理解する ・保育活動の発表を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・こども自然王国で行われているグループ活動への参加及びお楽しみ会の実施
平成8年度	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものための芸術文化活動について理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・青山円形劇場による移動公演を鑑賞
平成9年度	<ul style="list-style-type: none"> ・プロの語り部の「語り」を体験することで文芸の深さを知る ・全盲である講演者の生涯や体験にふれることで、自らの福祉観・人間観を再確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・語り部川島昭恵氏による講演会「川島昭恵と『語り』の世界」
平成10年度	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある人の体験と人柄にふれることで自らの福祉観・人間観を再確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・頸椎損傷者である遁所直樹氏による講演会「アドボカシーを考える」
平成11年度	(平成9年度と同じ)	
平成12年度	<ul style="list-style-type: none"> ・人形劇による表現の仕方を学ぶことで演じる側の工夫を理解する ・豊かな感性を養う 	<ul style="list-style-type: none"> ・「人形劇団ちょうちん座」による公演鑑賞
平成13年度	(平成9年度と同じ)	
平成14年度	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある人たちのスポーツへの取り組みを理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・車いすツインバスケットボールチームCometsによるデモンストレーション及び学生参加による体験試合
平成15年度	<ul style="list-style-type: none"> ・生活福祉専攻の通常カリキュラムでは学び得ない「福祉・保育・心理」の理念や知識・技術の修得をはかる 	<ul style="list-style-type: none"> ・語り部川島昭恵氏による講演・対談「ファイトこそ私の人生／先のことは分からない、だから面白い」
平成16年度	<ul style="list-style-type: none"> ・地域で暮らす障害のある方の生活を理解し、共に暮らす地域社会のあり方について理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・映画「自転車で行こう」の上映及び監督、新潟在住の障害者とのシンポジウム

30分ずつ講演していただき、残りを学生からの質疑応答を含めた講師との話し合いの時間とした。

3) 講師の略歴と講演テーマ

(1) 徳田明彦氏

新潟県福祉職OBであるが、教護院（現：児童自立支援施設）、児童相談所、児童養護施設、知的障害児者施設、障害福祉行政等幅広く経験され、現在は新潟県障害者交流センター所長として福祉の仕事を引き続きしておられる。今回は「障害のある人にかかわって、そして福祉専門職を目指す皆さんへ」というテーマの講演であった。当日は自身が初めて重度知的障害児施設で体験した戸惑いと困惑などを率直に語り、また障害のある人、本人が本音を述べた詩の紹介があった（資料1）。

(2) 岩井英光氏

新潟県福祉職の現職であり、新潟県身体障害者更生指導所長である。知的障害児者施設をはじめ児童相談所、社会福祉、障害福祉行政等の経験がある。今回は「障害者の支援、リハビリについて、私が経験したこと」というテーマの講演であった。内容は、現在勤務している施設の現状から、自身の体験を織り交ぜながら中途障害者の障害受容、リハビリの考え方等についてであった。

(3) 石橋富美世氏

新潟県では数少ない手話通訳士の資格を取得している。県庁障害福祉課で聴覚障害者の福祉に関する業務に携わり、新しく新潟県聴覚障害者情報センターができたときに基幹職員として採用されている。今回は「聴覚障害のある人に手話を通じてかかわって、分かりあえたこと」というテーマの講演であった。時折手話を交えながら、聴覚障害者の「あきらめ」—しかたない、あきらめるしかない—の心理、手話の表現方法—袈裟がけに切られる様子を表す—などについて貴重な体験を聞くことができた。

3. 「学生の振り返り」の結果

研修後、参加学生には振り返りのためのレポートを提出してもらった。「1. 心に残ったこと、感じたこと」、「2. 研修で気付いた自分の課題」、「3. その他」を掲げ、研修に参加したことと心に残ったこととそこから気づく自分の課題についてまず自分の言葉でまとめた後、その程度を数値で尋ねた。その程度（学びの程度）については「普通」から「強く」まで5段階でそれぞれ聞いている。当日研修会に出席し、レポートを提出した学生数は94人（1年47人、2年47人）であった。

1) 「学び」の内容

(1) 「心に残ったこと、感じたこと」

具体的な学生の記述をそれぞれみていると、①脳性マヒの方の書いた詩「かつてにするな」、②聴覚障害者が「しかたがない」「かまわない」という手話を頻繁に使うこと、③更生施設から救護施設に転居した方（知的障害者）の事例、④障害理解、⑤自己覚知について多くの記述をみることができた。

①「かつてにするな」の詩では、1年生では、「障害のある人に対してはとにかく周りの人が気を配り手助けしてあげた方がいいと思っていたが、その人の持っている力を少しでも理解し、できることは自身でやらせてあげることが自立へつながっていくことになるのかなと思った」、「いかに私たちは自分本位で障害者をみているかに気づかされた。障害がある＝不幸と結びつけてしまう人も少なくない。かわいそうだから何かしてあげなくてはという思いが自分の中になかったら嘘になるかもしれない。でも、本当の喜びや幸せなんて自分以外の誰にも決めることはできないのに、私たちはできないだろう、かわいそうにと決めつけている」など、自分本位に障害者のことを決めつけ、接していたという認識を持つものが多くみられた。2年生では、「当事者の詩を読むことで自分の考えと当事者の考えとの違いに気がつくことができた」、「自分のできることできないことを知っているのは自分自身であるから、周りはそれを理解し、すぐ声を出したりするのではなく、見守り、相手のできることをのばす支援が必要だと感じた」

といった「障害がある」ということ、「介護を受ける」ということを改めて見直すきっかけとなったようである。

②「しかたがない」「かまわない」という手話では、1年生では「このように考えてしまう状況に陥るのは全ての障害のある人に当てはまると思う。(講師の皆さんの)話に出てきた人たちは何回「しかたがない」と言い聞かせてきたのだろうか」、「聴覚障害者の中では、自分たちの事が理解されないことを『しかたがない』『かまわない』と考え、怒りや悲しみを出せない人が多いことに悲しく思った。そう思わせている私達の知識の少なさを改善していき、どんなことも受け入れられるようにしていかなければいけないと強く感じた」、「同じ人間なのに、誰にだって障害を負ってしまう可能性はあるのに、そういうこと(「お前らは聞こえない、自分たちとは違う」)を言うのも信じられないし、聴覚障害者の怒りや悲しむ権利までもが奪われていること」など、聴覚障害者の方たちの抑圧された状況を知り、そのように思わせてしまっている社会について、自分を含めて社会問題として捉える姿勢、障害理解への強い意識がうかがえる。2年生でも、「『しかたない』という意味の手話。怒り、悲しむ権利を奪われたことの多かったこと」、「『しかたない』という言葉で片づけられていた障害のある人たちの立場、その孤独」、「怒りや悲しみを表現できないことで、人として否定されているような気持ちを抱くのではないか」といった感想から、「しかたない」「かまわない」という手話の裏側にある、「聞こえないから」という理由で人として尊重されていないその現実と哀しさを感じた意見が見られた。

③更生施設から救護施設への転居の事例については、1年生で多く見られ、「私の中でも知的障害などの障害のある子どもは、施設に入所の方が幸せではないかという思いがあった。親が死んだ後と考えるとその方が安心ではないかと思うし、介助の場面でも自宅より充実、安心、家族の負担も軽いのではないかという周りの視点で考えていた」、「『障害のある本人よりもその親の考えに合わせてしまっていた』という話。親の『自分たちの死後、子どもはどんな

ってしまうのか』という気持ちは子を大事に思うという面で自然な感情なのかもしれません。しかしだからといって一生施設にいななければならないということにはならない」、「施設で一生を送ることになった話を聞き、実際には本人が望む生き方を支援していくべきだが、家族の要望にも応えなければならないという、双方への対応の難しさを改めて感じた」など、本人よりも家族の意向が優先されていること、障害者が施設入所を強いられている事実には衝撃を受けている。それと関連して、「聴覚障害者の人で、家族とのコミュニケーションすらとれないということ、親子の中に手話通訳が入らないとコミュニケーションがとれないということ」についても強い印象を受けた記述がみられた。

④障害理解では、1年生では「障害者が生きづらい社会をつくっているのはそういう考え方(できないだろう、かわいそう)であり、障害者を知らうとするどころか、差別と偏見の目で見て近寄ろうとしないことに問題があると改めて思った」、「日本ではどれだけ障害のある人への理解が乏しいか改めて実感した。どんなに社会に出て行きたくても、力があっても、社会的な理由で実現できないでいること」、「全ての障害において差別や偏見が世の中で消えることはないかもしれない。だがそれをしかたない、と片付けることのないようにすることは、できるかもしれない」など、障害者に対して決めつけてきたことを認識し、自分自身の中にある差別・偏見を意識し、それを改善していく姿勢をみることができた。さらに、「福祉というものは、ただ本人を支援するだけでなく、その家族の支援も必要だし、本人が劣等感を抱かないような環境づくりも必要だし、本当に広いものだ」と実感した、「普段、障害のある方と接する機会がないと、障害に対して理解する場もないし、誤った偏見を生んでしまう。保育所や小学校など幼い頃に利用する施設で積極的に障害児を受け入れてみてはどうだろうか」など、「生得的なものではない偏見」を社会として克服していくために、本人が、家族が、社会がいかに障害を理解していくかということが挙げられている。

2年生では、まず「障害者に冷たい社会の状況」や「聴覚障害者の方たちが家庭や職場で孤

立状態にあること」、「聴覚障害のある方たちは見た目でわかりにくい分、理解されていないこと」といった障害のある人たちが置かれている状況に気づき、その状況を生み出している偏見や差別を「生得的なものではなく、まず大人が理解し、周りや社会が作り出していることを把握する必要がある」、「差別・偏見は『周囲と違うから、少数派だから』という概念から生まれるのだと感じた」といったように、その根本に目を向けている意見があった。その上で、障害理解を進めていくことについて、「中途障害の受容の難しさ。失われた機能にのみ考えていると前に進めない。残存能力を見つけ劣等感を感じることがないように支援の仕方を考えることが大切」、「受容にはあきらめるという意味も含まれているという話を聞いて考えが少し変わった。このあきらめは否定的でなく、できること・できないことの区別がわかったり、できないことをしようといつまでもこだわるのではなく、もっとリラックスした生活を送れるようになるためのものだと思う。受容は当事者・家族の生活を豊かにするきっかけであるが、できないことがはっきりするあきらめの部分も持っていることを知り、心に残っている」といった、障害理解があきらめではなく、障害者にとって、また援助者にとっても新たな一歩の始まりにつながることに気付かされた意見も見られた。その上で、「障害のあることを特別視するのではなく、ひとりの人間として生活することができるような環境作り、周囲の意識が重要」といった環境の重要性を指摘する声もあった。

⑤自己覚知は、社会福祉援助における専門職に求められる基本的な事項であり、講義等ですでにこの言葉について学んでいる2年は、特にこの言葉が印象に残ったようである。「人と接するときには自分の価値観や感情についてよく理解しておくことが必要」、「自分の価値観を基準として相手のことを考えるという狭い考えを持ってはいけない。そのためにはまず自分という人間をしっかり理解すること（自己覚知すること）で相手を批判せずに受け入れることができるということに改めて理解できた」といった感想が述べられていた。また自己覚知が、「自己覚知ができていないと、ラポール形成に影響

する。受け手と話し手の間には差がある」、「受け手に話し手の伝えたいことが100%伝わるわけではない」、「聞こえないことが障害なのではなく、コミュニケーション障害が発生することなのだ」といったコミュニケーションに大きく影響することを指摘する意見が見られた。

学年による違いをみると、1年生は「かつてにするな」の詩に触れているものが多く、現場の話、実体験に心を揺さぶられている。2年生は、そのような現場にたいする直接的な感想よりも、そういった事実から、専門職に求められる「自己覚知」、「障害理解」の必要性を強く再確認している。

2) 「研修で気づいた自分の課題」

こうした、「心に残ったこと、感じたこと」を受けて「研修で気付いた自分の課題」として1年生の多くが挙げているのは、ボランティアなどに積極的に参加し経験を積んでいく、もっと勉強をしてより知識を深める、いろいろな人の話を聞くなど「自分を磨く」ということであった。特に、障害理解を深めていくということで、「その人の立場に立つ」、「様々な見方をする」、「知ろうと努力する」、「実体験を通して学んでいく」などが挙げられていた。具体的な接し方としては、「笑顔」を第一に挙げているものが多数見られた。「『笑顔は相手の心を開く』という石橋さんの言葉が印象に残った」とあるように、石橋氏の話から大いに影響を受けている。また、「温かい心、冷たい頭脳、優れた行動力、人間関係の形成、そして健康の5Hを身につけていかなければならない」という「支援者の5H」についても積極的に取り入れていこうという姿勢がうかがえる。

このような障害理解への意識の高まりの1つとして、今回の研修を通して「決めつけてきた」自分への反省があったことがうかがえる。具体的には、「福祉」と一言と言っても本当に様々な仕事があると改めて気づいた。福祉の仕事にたずさわる多くの先輩のお話を参考に、将来の自分のプラスにしていきたい、「『音のない生活を想像できますか』と問われて、そんなことを考えてみたこともなかった。もちろん私たちにその世界は到底理解できないものかもしれない

けど、それでも知ろうとする努力はしたい」、「自分で勝手に『この人はこう思っているんだ、こうしたいんだ』と決めつけしないで、その人（障害者）の立場になって考え、行動できるようにになりたい」、「偏見の克服、受容。障害者自身が諦念を持ち続けていることは、この上なく悲しい。私はそんなことを思わせないように努力したい。そのためにもまず必要な知識等、しっかり身につけていかなくてははいけない」、「『何かを感じとろう』という気持ちで相手の話を聞くことができるようになりたい」、「“笑顔は自分にも力を与え、相手にも力を与える”と聞いたとき、相手もまきこんでしまうような優しい笑顔と雰囲気を持つ人になりたいと思った」、「今回の講演を聞いて“障害”というイメージが大きく変わった気がした。たった2～3時間でイメージが変わるのだから、もっともっと色々な話を聞き、実際に関わっていくことで“障害”とはどのようなものか、自分なりの考えを持っていけるものかと思った」、「専門職者には、専門知識はとても大切だが、それと同じぐらい『今、この人（子）は何を求めているのか』ということに気づくことが必要だということ」、「地域住民として、女性として、福祉職に就くものとして『自分の立場』を考えること。『自分の立場』が理解できなければ、『相手の気持ち、権利』を考えられないであろう。現場に出る前に、しっかりと自分の立場を見つめ直したい」など、何よりも自分自身の問題として障害者をめぐる問題を捉え、その改善策を自分自身の視点で考えている姿勢がうかがえる。

そして「社会福祉を利用することに抵抗がある人もいるという話を聞いて、もっと地域と密接に関わり、地域住民と交流を深めることが大切だと思った。障害は障害者自身にあるのではなく、現在の社会や周囲の環境にあるということも多くの人に知ってもらふ必要があると思った、「障害のある人に関わりを持つ人々が責められたりストレスに陥ることへの対策が必要。なぜなら普段接する人がその周囲の言動に影響されてしまったら手を差し伸べる優しさをもてなくなり『なぜ自分がこんな目に…』と“障害者”を受け入れられなくなるから」という、障害者を取り巻く環境、社会についての意識を高

めている。

2年生についても自己の課題をまとめると、次のようになる。まず、多くの2年生が「自分の価値観から人を見ているということ自分をしているのかもしれないと思ったので、もっと客観的に見ていけるようにしたい」、「自分はどういう性格で、どんな時に喜び、どんな事で怒るのか、ありのままの自分を受け入れていくようにしたいと思いました。自分を客観的に見る姿勢もとりたい」、「自分の働きかけがどのように相手に伝わっているのかを考えてみなくてはならないこと」といった自己覚知とそこから生まれてくる「コミュニケーションのあり方」を課題として挙げていた。特にコミュニケーションについては、「作り笑いではなく、『あなたと一緒にいれて、本当に嬉しい！楽しい！』ということが伝わるよう心の底からの笑顔を忘れないようにしたい」、「差別的な表現に気をつけること」、「コミュニケーションがうまくとれない人たち（聴覚・視覚障害等）とのコミュニケーション方法」、「コミュニケーションはただ聞くだけで行うのではなく、人の目を見て話すこと」といったコミュニケーションに対して具体的な課題を掲げているものもあれば、「受け手と話し手のメッセージの受け止め方に食い違いがあることを意識してコミュニケーションをすること」、「自分の言いたいことが相手にどう伝わるのか、受け手の立場になってよく考えて逆の場合でも何が言いたいのかをよく考えるようにしたい」といった相手との信頼関係を構築していくための基本的な視点から捉えているものもあった。

次に障害理解について、3人の講演者から障害について具体的に学ぶ機会となったこの研修では、障害について、自分たちの知識や認識の浅さに気づき、課題として学んでいく必要に気付くことができたようである。「障害についてより詳しい知識が必要であると思った。私のまだ出会っていない場所で私のよく知らない障害を持つ人がいると思うので、その人たちに会った時、自分はどういった態度をとったらよいのか、その時々、その人その人にあった態度を示せるように柔軟性が必要だと思った」、「障害のある人に対する支援でも“障害の受容”につ

いて意識的に支援することが必要なのだと感じた。様々な障害のある人たちにこれから出会っていくと思うので、客観的な立場で障害を受容し、相手のことを考え支援できるような専門職になろうと思った」、「偏見は生得的なものではないので、保育士として障害のある子どもたちに対して、他の子どもたちが偏見や差別をもたないようにしたい」といった課題が挙げられていた。

また「偏見は持っていないつもりでも心のどこかでこれはきっとできないだろうと思っている部分があったから、つい手を出しすぎていたのではないか。自分自身の未熟さと考え方が自己中心的になってしまうことで、結果的に態度や表情、行動でも相手を焦らせていたことが多かったかもしれない。これからは自分自身を成長させる努力をするとともに、たとえ時間がかかってしまったとしても長い目で見守り援助していけるようになりたい」、「これまでの実習では『何のために、誰のために支援をするのか』という考えを持って対応することは少なかったように思う。目の前にいる人のこと、周りの人のことをよく考えながら、その場だけでなく、少し先のことも見通して考えられるように、少し余裕を持って対応できるようにしたい」といった福祉専門職として自己を磨くことを課題として挙げている者もいた。

2) 「学び」の程度

これまでみてきた「学び」の内容について、1人ひとりの感じた程度を尺度測定からみていく。

(1) 「心に残ったこと、感じたこと」

全体では「強く (5)」と回答した学生が44人 (46.8%)、「かなり (3)」25人 (26.6%)、「(4)」21人 (22.3%) となり、ほとんどの学生が研修から何らかの強い印象を心に残しているといえる。しかし学年別に見ると表2のようになり、1年が「強く」と回答していることと比べると、2年は「かなり (3)」、「(4)」に集中していることがわかる。 χ^2 検定の結果も学年の違いによる有意な差が認められた ($\chi^2=20.26$, $df=4$, $p<0.01$)。

表2 「心に残ったこと、感じたこと」の程度

	普通 (1)	(2)	かなり (3)	(4)	強く (5)	合計
1年	1	0	7	7	32	47
	2.1%	0.0%	14.9%	14.9%	68.1%	100.0%
2年	0	3	18	14	12	47
	0.0%	6.4%	38.3%	29.8%	25.5%	100.0%
合計	1	3	25	21	44	94
	1.1%	3.2%	26.6%	22.3%	46.8%	100.0%

(出所) 「研修振り返り」より作成。

(2) 「研修で気づいた自分の課題」

全体では「強く (5)」39人 (41.5%)、「かなり (3)」33人 (35.1%)、「(4)」16人 (17.0%) とこれもほとんどの学生が自己の課題を強く意識したと言える結果になった。同じく学年別にその結果を見ると表3のようになった。ここでも1年の気づきの程度と比較して、2年が若干弱いといえる。 χ^2 検定でも学年による違いが認められた ($\chi^2=11.14$, $df=3$, $p<0.05$)。

表3 「研修で気づいた自分の課題」の程度

	普通 (1)	(2)	かなり (3)	(4)	強く (5)	NA	合計
1年	0	2	10	7	27	1	47
	0.0%	4.3%	21.3%	14.9%	57.4%	2.1%	100.0%
2年	0	2	23	9	12	1	47
	0.0%	4.3%	48.9%	19.1%	25.5%	2.1%	100.0%
合計	0	4	33	16	39	2	94
	0.0%	4.3%	35.1%	17.0%	41.5%	2.1%	100.0%

(出所) 表2と同じ。

(3) 気づきと課題のつながり

次に、「心に残ったこと、感じたこと」の程度を基準にして、「研修で気づいた自分の課題」の気づきの程度をみると (表4)、「心に残ったこと、感じたこと」と「研修で気づいた自分の課題」の程度が同じ (「かなり (3)」→「かなり (3)」、「強く (5)」→「強く (5)」など) であったものが54.3%と過半数以上を占めている。「心に残ったこと、感じたこと」よりも「研修で気づいた自分の課題」で程度が高くなったものが18.1%、逆に低くなったものが25.5%となっている。7割の学生が心を揺さぶられたのと同程度もしくはそれ以上の課題に気づいたと回答している。これを学年別にみると、2年生では程度が「同じ」であったものが1年生よりも5%程度高く、その分1年生で「低まる」が5

表4 「心に残ったこと、感じたこと」と
「研修で気付いた自分の課題」の程度の変化

	同じ	高まる	低まる	NA	合計
1年	24 51.1%	9 19.1%	13 27.7%	1 2.1%	47 100.0%
2年	27 57.4%	8 17.0%	11 23.4%	1 2.1%	47 100.0%
合計	51 54.3%	17 18.1%	24 25.5%	2 2.1%	94 100.0%

(出所) 表2と同じ。

%程度高くなっている。

程度の結果をみると、1年生では「心に残ったこと、感じたこと」で7割におよぶ者が「強く(5)」と回答しているように、感じたことの程度は非常に高くなっていた。その一方で、「研修で気付いた自分の課題」については、その程度(「強く」)を1割ほど下げていた(57.4%)。さらに全体の程度の変化をみても感じたことに比べて自分の課題が低くなる者が3割弱を占めているので、心への衝撃は大きかったものの、それを自分の課題としてイメージすることが難しかったように見える。2年生では、「心に残ったこと、感じたこと」で一番多い回答が「かなり(3)」の4割、ついで「(4)」の3割であり、「研修で気付いた自分の課題」では「かなり(3)」が約5割を占め、1年生と比べると感じたこと、課題の程度は低い。2年生の場合は、この研修時点で、2回ないし3回の実習を終え、ボランティアに参加するなどそれなりの経験を踏まえてきているため、新鮮さという面から感じる程度が低めにでているように見える。ただ、そうした経験を踏まえ、福祉専門職としての就職が意識として高まるこの段階で、自分自身の課題をより高く設定する傾向が高まらないのは、分かったつもりになっているなど、課題として引きつける力が少し弱くでている可能性も否めない。

3) 「その他」の意見

「その他」としても様々で率直な意見がみられた。まず1年生の意見をみると、この研修全体について、「質問をしたかったが、時間が少なかった」、「1人ひとりの先生の話す時間が短かった。講師は1人でもよかった」と言ったプログラム構成の問題、「ユニゾンプラザには初

めて入った。堅苦しいイメージがあまり感じられなくて誰でも使いそうな感じでよかった。あのような建物が増えたと相談できたり、誰でも利用できるような感じになればよいと思った」などこれまで接することのなかった身近な施設に触れ合うことができる機会、「2年生の質問の仕方が勉強になった」など、上級生の姿勢を学ぶ機会にもなっていた。学習という面からみると、「福祉の現場で実際に働いている方の講演を聞くことはめったにないので、とてもためになった」、「この道30年以上続けてみてきた方々の言うことは重みがあり、考えさせられることが多かった」、「授業で知ったことなど普通に話の中のできて、今やっていることがそのまま福祉の基礎になるということを変更して知り、頑張ろうという気がいっそうわいた」というように、教科書では学ぶことのできない話・実験に興味を高めつつ、普段受けている授業と今回の話が密接につながっていることを理解し、さらなる学習意欲の向上にもつながっている。手話については多くの学生がいろいろなところで取り上げていて、「手の動きにももちろん目がいったけど、それよりも表情や口の動きでも相手に伝えようとしている姿がすごく印象的だった」、「私は、すごい音に頼った生活をしていると気づくことが多かった。手話は前に少し習ったことがあったけどもう忘れてしまった。手話は私には忘れてしまう存在でも、聴覚障害の人には声と同じものだと思うと、軽くみてはいけなかった」となど、手話の習得に積極的な声が多くみられた。

しかし「助けを求めている人がいればためらわずに助けることができるようになりたい」とある一方で、『「かってにするな」を読んで、障害者に接するのが不安になった。私が相手を思ってやったことでも『大きなお世話』と思われたら悲しいし、相手も嫌な気持ちになるだろう」、「人に親切にすることはいいことだと思っていたけど、『かってにするな』を読んで、それは大きなお世話だったことがわかったこと」など、これまで無意識に接してきたことを意識すること、現実を知ることによって、不安が生まれたという声もみられた。

また、多くの場合、今回の研修を通して、「決

めつけてきた」ことを意識し、そうしたことへの反省を踏まえて、提起された様々な問題を自分自身にひきつけて、その中で自分はどうか、支援者としてどうするか、という視点がみられたが、「施設で一生を送ることになった話を聞き、実際には本人が望む生き方を支援していくべきだが、家族の要望にも応えなければならないという、双方への対応の難しさを改めて感じた」と捉えながら、「家族は、自分たちの意見ばかり通そうとするのではなく、まず本人がどのように生きていきたいかを理解し、本人の考え方を尊重しなければならない」というものもみられた。

2年生が記した「その他」にもさまざまな意見が見られた。まず「現場の人たちの生の声を聞くことができてよかった」、「今回の研修で感じたことを就職の際にも考えていきたい」、「2年生より1年生の方がためになったのでは?」といった研修内容に対する意見があった。次に「重度の障害のある人たちの『本当に望んだ人生』とは何なのか。それが『地域に帰る』ことならどのようにすればいいのか。手厚い支援が必要であることと、地域に帰ることの矛盾」、「ノーマライゼーションが現状では『絵に描いた餅』状態であることに気づいた」、「亀田に住んでいるが、県短で学ぶまで『ふれ愛プラザ』が何のための施設なのかわからなかった。『地域移行を支援します』とレジュメにあったが、それならまず亀田の人たちにふれ愛プラザのことを広報活動するのも必要なのでは」といった、現実的に障害理解を促進するための難しさについての意見があった。また「実際に耳の不自由な人に思い切って簡単な手話で話しかけてみた。イヤな気分にはさせないかと心配したが、とてもすてきな笑顔で答えてくれた。手話は確かに覚えるものだが、心で通じるすばらしい言葉だと感じた」といった手話が聴覚障害のある方とのコミュニケーション手段であることを経験した意見もあった。その一方で、「家族内での通訳に驚いた。子どもの障害がわかったら、親としてよりよい方向に行くための方法を探すと思っていたが、話をするときは他人任せ、それが家族なのだろうか」といった障害のある人の家族がその人をどう受け入れているかという点に疑問

を感じている意見もあった。

4) 考察

今回の研修を通して「障害のある人を支援する」ということについて、学生たちは様々な視点から気づき、学んでいることがわかる。

私たちは誰でも「障害がある」ということに対し、十分に理解していないにもかかわらず、周りからの意見や私たち自身が持つ先入観にとらわれていることが多い。同じ障害であっても人それぞれできること、できないことは違っており、1つにくることなどできないのは、どんな人間であっても同じである。まずその先入観に気づくこと、これが自己覚知の第一歩と言えるだろう。自己覚知に対する学生たち自身の気づきから、この研修会がその第一歩を踏み出す機会となったようである。そして障害のある人たちに対する先入観をどこから得ているのかを考えることも必要である。「偏見や差別は生得的なものではない」と言う講演者の発言があったが、生得的でないものであれば、いったいどこでそれを得ているのかを考えることが、偏見や差別を断ち切る方法の1つと言える。また、自己の偏見や差別をなくしていくためには、障害のある人たち自身の声に耳を傾けることが大切である。その大切さを学生たちは紹介された当事者の詩や講演から学ぶことができていた。障害理解とは、周りの意見や私たち自身が持つ先入観に踊らされるのではなく、自ら障害のある人たちと向き合い、その生の声を聞くことで理解をすること、障害に対する認識を気づくことから始まると言えるだろう。そこから生まれる障害理解は、信頼関係へと繋がり、望ましい生活のあり方を共に考えていくことになるのではないか。

こういった学生たちの気づき、学びを生み出しているのは、今回の研修会の講師が、長く福祉現場で実践を積み重ね、障害のある人たちの支援とは何かを常に考え、自らを成長させてきた方たちだったということが大きい。福祉専門職の先輩として、講師たちの人間観、福祉観に触れることができたことで、学生たちも福祉専門職のあるべき姿を見出すことができたと言えるのではないか。

以上、学生たちの振り返りから、「障害のある人たちの支援について、より深く原点から学ぶ」という今年度の研修会の目的、特にそのキーワードとなる障害理解と自己覚知について学び、自己の課題へとつなげていると言えるだろう。

むすび

今後の研修会のあり方についての提言として以下のようにまとめることができる。

これまで生活福祉専攻では年1回福祉研修会を実施してきたが、この研修体験が学生にどのような受け止められているかについて、まとめられた形で残してはこなかった。その狙い、目的が達成されたのか、学生の心の中にどのような体験が残ったのか等について可能な限り確認しながら、その後の学生指導、教育に活用していくことが大切である。

そして今後、研修が「その場限り」にならないで、その体験の意味を、体験を明確化し深める工夫・改善が必要かもしれない。例えば、今回は「振り返り」を行うことで自己の体験を意識化させる試みをしたが、更にその「振り返り」に教員がコメントを付して返す等やり取りの中で理解や自己覚知が深まっていくことが期待できるのではないかと考えられる。さらに、今回の心に残ったこと、今後の課題が、時間の経過、その後のボランティアなどの経験や福祉専門職の意識の高まりなどとともどのように変化したのか、そのときの課題設定とどのように向き合ってきたのかなど、そのときの気持ちを再確認するためにも、時間をおいて尋ねてみることも非常に重要だと考えられる。

また、これまでは教員側が企画実施してきているが、何らかの形で学生が企画段階から参加して教員と学生が共同で作り上げていく、いわばコラボレーション型の研修スタイルを検討することも意味があるかもしれない。

このように、研修会における体験を振り返り、その体験を明確化して深め、さらに主体的な参加意欲の向上を図っていくことを今後につなげていきたい。

(資料1) かってにするな 富永房江

不幸な娘だと かわいそうな娘だと
人は私に言うけれど
勝手に決めるな ばかやろう
一目見ただけ人間に何がわかる
私の幸せ知らないくせに
勝手に決めるな ばかやろう

えらいねだとか すごいねだとか
人は私に言うけれど
勝手に決めるな ばかやろう
今、会ったばかりの人間に何がわかる
私の喜び知らないくせに
同情の押し売り 勝手にするな

たいへんだから やってあげますよと
人は私に手を出すが
勝手に決めるな ばかやろう
私を知らない人間に何がわかる
私の力を知らないくせに
大きな同情 大きなお世話

困った時には自分の口で
お願いしますとたのむから
それまでほっといてください

勝手に決めるな ばかやろう

参考文献

- 海老沢千冬・堀尾雅美・徳田克己・埴和明 (2000) 「大学生が受けてきた障害理解教育の内容—学校における障害理解教育を中心に—」『障害理解研究』4,1-10
- 高橋五江 (1994) 「社会福祉援助職の自己覚知について」『淑徳大学研究紀要』28,163-177
- 富永光昭・小川敦弘 (2002) 「障害理解教育の授業分析の課題と方法—小学校第2学年の授業実践を通して—」『大阪教育大学紀要第IV部門』51,81-105
- 松田純子 (2000) 「『障害』経験と『障害』に対するイメージ—短大幼児教育科生の障害理解に関する一考察—」『洗足論叢』31,121-133